

二松學舎 松苓会報



CONTENTS

- P2 卒業生の皆さんへ
- P3 第15回ホームカミングデー
- P6 教壇を去られる先生方
- P7 松苓会各支部活動報告
北海道支部・宮城県支部・栃木県支部・茨城県支部・群馬県支部・
東京都支部・神奈川県支部・長野県支部・宮崎県支部
- P13 同期会・OBOG会
- P14 大学だより
- P16 『発展期を迎えた頃の二松学舎』
- P17 恩師からの便り 卒業生だより
- P18 会員からの便り
- P21 学生会員だより
- P23 第88期卒業生同期会を結成
- P24 寄付者芳名 訃報 編集後記

No.63 2020年3月16日
二松學舎大学同窓会広報誌

88期生の皆さんへ



二松學舎松苓会
会長
廣田 克己

88期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

「二松學舎松苓会」(以下、松苓会)は卒業生の皆さんの入会を歓迎いたします。

「松苓会」は専門学校1期生の卒業とともに昭和6年に創設されて88年になります。卒業生は約3万人で、都道府県に47支部があります。先輩たちは世界中の様々な分野で活躍しています。

「88期生の皆さん」と書いたのは訳があります。居住地域を基にした支部の活動がこれまでの松苓会員にとっての同窓会活動でしたが、今年の卒業生つまり皆さんたちから同期会が正式にスタートすることになりました。これを機に、これまでの学部ごとの卒業期数を統一することにしました。今後、松苓会では同一の卒業期数を使用します。ですから、みなさんは松苓会発足から88年目の卒業生ということ、「88期生」となります。

さて88期生諸君、皆さんが卒業後最初にすることは、父母の皆さんに感謝の言葉を伝えることです。社会に送り出すまでの子育ては並大抵ではありません。子供を育て上げることは、人生の一大事業です。その父母の皆さんが今日、節目を迎えたのです。祝いと感謝の言葉を受けるべきは父母の皆さんです。

次に、これから飛び込んでいく場所での自分の居場所を一日も早く作る事です。社会はそれほど甘いものでないことはご存じの通りです。職場での居場所は与えられるものではなく、自分で作るものです。また家庭人、社会人としての立場も同じです。これまで身につけて来た力を大いに駆使してください。

いよいよ皆さんが自分の足だけで歩む生活が始まります。当分は余裕などないと思いますが、時々は帰ってきてください。毎年実施される「ホームカミングデー」「異業種交流会」や各支部主催の総会、文学散歩、賀詞交歓会、また折に触れて実施される「同期会」「ゼミ会」「サークル会」等に顔を出してください。恩師や学友、先輩・後輩たちとの語らいは、きつと明日からの力になると思えます。「松苓会」はいつでも皆さんを待っています。時間が取れない時でも松苓会との繋がりは作っていただくさい。

どうぞ身体に気をつけて、遅く生きてください。

卒業生の皆さんへ



二松学舎大学
学長
江藤 茂博

てその根っこにある「漢学の道理を法理に照らせば、一々符号せざるは無し」(「中洲講話」より)

り)という創設者の三島中洲の人文学と社会科学を結びつけた考えがそのまま生きているこの二松学舎大学の学びを、生き抜く力として欲しいし、そして本当の知力に向かつてさらに歩んで欲しいと思います。最初のステージは、自分のためだけに全力を傾けることになるのかもしれませんが、しかし、いずれは、誰もが豊かに暮らせる社会へ貢献する、いわゆる無私の人物になって欲しいと思います。人によっては、二番目のステージは、自らの家族のために力を向けなければならないかもしれません。それでも、社会への貢献を忘れないこと、利欲に囚われないことを、各自の内を持って欲しいのです。いつの時代も先は見えないものです。だからこそ、皆には新しいことに挑戦してもらいたいし、私どもは皆の可能性を信じ、新しい社会を豊かなものにしていただきたいと思うのです。皆の新しい歩みをここに祝すと共に、二松学舎大学もまた社会を豊かにする人材を送り出すつもりです。

ご卒業、おめでとうございます。これまで幾度か繰り返してきた卒業でしょうが、多くの皆さんは、ここで社会人としての第一歩に向かわれることと思います。この第一歩とは、個人として生きていくことに力を与える最初のステージであり、皆が期待と不安のなかを進んでいくことになると思います。ここからは、いままでも学んだことを十分に生かし、何よりも自分の可能性に挑んでください。生き抜く力を持つ皆さんの前には、未踏の大地が広がっているのです。ただ、大学で学んだことは、これからの社会でのさまざまな経験をj得ること、さらに本当の知力というものに編みあがるものです。そして本当の知力は、私利私欲に囚われない、無私精神と繋がるものだと思えます。そういう意味で、皆さんはまだ学びの途上なのかもしれません。文学部で学んだこと、国際政治経済学部で学んだこと、そし

第15回 二松学舎大学ホームカミングデー

今年度も創縁祭（大学学園祭）時期に合わせ、2019年11月2日（土）に第15回ホームカミングデーを無事開催することができました。

本学では卒業生の皆さまに、在学生の活躍する姿や大学施設、学園祭の様子を知っていただきたいの思いから、例年、創縁祭（大学学園祭）の時期にあわせて実施しております。ホームカミングデーでは「二松学舎大学への愛校心を高めてもらい、教職員や現役学生と交流の場とする」をテーマに、今年度も卒業生の皆さまにお楽しみいただけるイベントを企画しました。

前日から開催した「卒業生作品展」は毎年開催している恒例企画です。今年は書や写真など35作品の出品があり、いずれも力作ぞろいでの来場者から好評いただきました。

九段2号館ラーニング・コモンズでは、「公開講座」や「スタンプラリー」等の来場者参加型イベントを実施し、多くの卒業生にご参加いただきました。スタンプラリーは、ラーニング・コモンズと九段1号館11階の卒業生作品展会場を結ぶコースになっているため、両方の会場に向かうことで、創縁祭の雰囲気も感じていただくことができましたのではないのでしょうか。今年の参加品は、本学公式キャラクター「ねこ松」のランチバックとキーホルダーを用意し、どちらかをお選びいただきました。

さらに、公開講座「学生のころを思い出して、講義を受けに来ませんか？」では、今年は文学部から伊藤晋太郎教授と中川桂教授、国際政治経済学部からは土屋茂教授の3名を講師に迎え実施いたしました。学生時代、先生方のゼミ生だった方々のご参加が多く、幅広い年代の卒業生とご交流いただけたと思います。

その他に、会場内にて「漢学塾 二松学舎『本塾』復元ジオラマ」の展示をご覧いただき、卒業生の寄せ書き「一言ノートコーナー」では卒業生の皆さまそれぞれの在学当時の思い出等を綴っていただくことができました。

ホームカミングデーは、大学を卒業し社会でご活躍されている卒業生皆さまに寄り添うイベントでありたいと実行委員一同願っております。懐かしく、またそれだけではない新たな二松学舎大学の魅力を感じていただけるようなイベントを企画し、卒業生皆さまのご参加をお待ちしております。

（実行委員 五十嵐理紗）

楽しいホームカミングデー



卒業生からの メッセージ

土屋茂先生の公開講座に参加して

赤井はる香（政8）

土屋先生の公開講座の案内を大学からいただき、貴重な機会なので受講しました。

卒業したところからはガラリと変わった新しい建物に、戸惑いながら講座の開かれる教室にたどり着きました。

公開講座の内容は家族法。大学生の頃、タレントの代理母出産が話題になり、遺伝上の母から卵子を採取し、代理母の出産までに至る過程を追ったテレビのドキュメンタリーを私は熱心に見ていました。出産をした事実で母とみなす日本の民法が、出産＝遺伝上の母ではなくなった時代にどのようなものか興味を持ったので、卒論にはこのテーマを選びました。公開講座で久しぶりに読んだ家族法の条文は、時代を思わせる文章をそのままに、進む生殖技術とは裏腹に新たに改訂されたところはないことを知り、もどかしさを覚えました。

大学を卒業してから月日が流れ、私自身も職場で中堅の立場になりました。任される仕事内容も難易度が増してきました。大学で学んだ文章の解釈力などが仕事に活かしている



ように感じていきます。

講座の後は、新たに出会った後輩と歓談をすることができ、それぞれがひたむきに頑張っているお話を伺い、自分自身への励みになりました。気分転換にもなり、良い時間を過ごすことができました。

ホームカミングデーに参加して

諸 拓視（文87）

歴史と伝統ある二松学舎大学を卒業してはや半年余りが過ぎたところ、恩師である伊藤晋太郎先生よりホームカミングデーの案内が届いた。

「また伊藤先生の講義を聴くことができる」

もともと同時に開催された創縁祭を見学する予定だったため、是非参

加しようと久しぶりに九段の坂を上った。

ホームカミングデーでの伊藤先生の講義は、昨年開催された「特別展三國志」に合わせ、過去に先生が出演されたテレビ番組の話も織り交ぜながら、史料をたどっていく形式で、卒業してもなお、新たな知識を得ることができた。

講義終了後は、ゼミナールの先輩方とお話しする機会があり、用意された場所では到底時間が足りずに、伊藤先生の研究室までお邪魔して、伊藤ゼミナールの大先輩である1期生の方々と同様のゼミの講義内容や、卒業後のご活躍についての話題、私たちがどのような講義を受け、どのような卒業論文を書いたかなど、陽が落ちて暗くなっているのも忘れ



るほど夢中になって話していたことが、今なお強く印象に残っている。

皆さんも、恩師の先生がホームカミングデーの講義を担当するときは母校に足を運んでみてはいかがだろうか。

学生時代を思い出す充実した講義と、今回原稿の執筆をご指名下さった伊藤先生に感謝を申し上げ、結びとさせていただきます。

中川桂先生の公開講座に参加して

水野 遥香（文82）

卒業してからも創縁祭には毎年顔を出していましたが、公開講座に参加したのは今回が初めてでした。

学園祭の中の企画とはいえ、久しぶりに講義を受けるとなると期待だけでなく、ほんの少し身の引き締まる思いも感じました。しかし教室に入り先生お手製の資料に目を落とすと、内容の雰囲気は当時から何も変わっておらず、懐かしさと安心感が込み上げました。

落語の実演を交えての講義は、大変面白く聴講させていただきました。毎日講義を受けていた学生の頃は当たり前になっていましたが、よく知らない事柄について「教わる楽しさ」を改めて感じる事ができました。同時に、あの頃はどれだけ贅沢な時間を過ごしていたのだろうか、と過去の自分に思いを馳せました。

同じゼミに所属していた友人達と



▲ スタッフ Tシャツでお出迎え

大好評！
ねこ松
グッズ

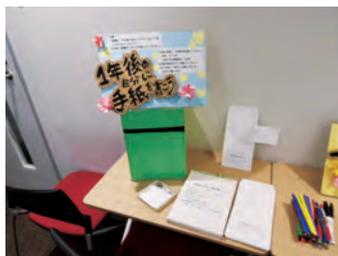
も再会することができ、講義後は先生も含めて皆さんと思い出話に花を咲かせました。忘れていたと思っていた出来事も、話してみると次々とよみがえります。充実した学生時代だったと再確認しながら、有意義なひと時を過ごすことができました。



第15回ホームカミングデーのひとコマ



創縁祭もにぎやか



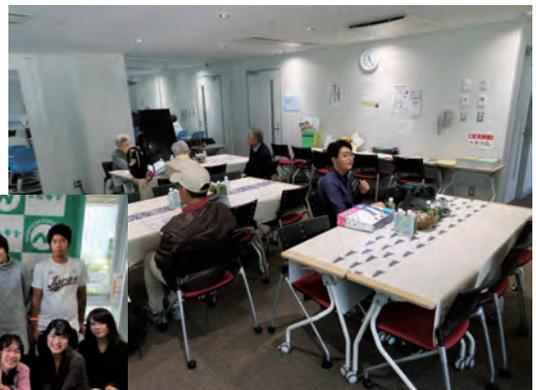
コーナー色々



グッズも販売しました



作品展も見ごたえ十分



くつろぎの交流スペース



懐かしい先生やご友人・先輩・後輩と楽しいひと時

ホームカミングデーにご参加いただいた卒業生の皆さま、ありがとうございました！
また来年もお会いできることを楽しみにしています。

教壇を去られる先生方

退職に際してー沼南キャンパスの思い出

土屋 茂



信州は諏訪の地に生まれ育った私にとって、ビルだらけの九段キャンパスよりも緑豊かな沼南キャンパス（現柏キヤンパス）に親しみを抱いている。そこで国際政治経済学部が1年から4年まで学んでいた沼南キャンパスについて適宜に記してみようと思う。

平成3年4月に設立された国際政治経済学部は、平成5年3月1日に赴任した。通常ならば4月1日頃からとなるはずのものが、3月1日にと二松學舎大学から指示されていた。沼南キャンパスと聞いていたのも、神奈川県と誤解することもあった。日本大学法学部（大規模大学）・青森県八戸市に出来た八戸大学（小規模大学）を経て、2学部3学科（定員600人）という中規模大学への異動であり、色々な大学を経験することになった。

初年度は「民法」及び「3年ゼミ」を担当し、教務委員会に属した。前任校と比して楽になったと感じていた。2号館5階の研究室で本の整理をしながら、ゼミ生との交流を深め

ていった。この頃の2号館は外壁にくぼみがありスズメの巣が多数存在するような建物となっており、時には子スズメが廊下に迷い込むこともあった。研究室の整理が一段落すると、手賀沼で釣りができるかと思いつき、無謀にも道なき道を通って手賀沼まで往復したが、現場を見て釣りはあきらめた。なお、大学の周辺にママシがいることは知らなかった。

体育館では、白石先生を中心にゼミ対抗バレーボール大会が行なわれ、教員、学生の交流を深める企画もあり、良い思い出となった。

ちなみにこの頃は、大学からタクシー券が配布され、柏駅と沼南キャンパスの移動も苦にならなかった。しかし、数年後には廃止されてしまった。したがって柏駅でスクールバスを待つのは、特に冬場は大変であった。

退職してからも柏キャンパスに行ってみたと思うている。

- ・ 日本大学大学院法学研究科修士課程私法学専攻修了
- ・ 入試委員長
- ・ 学科主任
- ・ 専攻主任
- ・ ハラスメント防止委員長
- ・ 附属図書館長

私にとつての二松学舎

長谷川日出世



昭和63年4月に文学部専任講師として着任、それ以前2年間非常勤講師を務

めさせて頂いていたので、二松学舎での教員生活は34年となりました。当時の二松学舎は文学部だけの単科大学であり、その後国際政治経済学部が新設され、新学部へ転籍しました。今思い出してみても、中々優秀な学生が多かったと思います。私は、その担当科目（日本国憲法「文学部」、憲法「国際政治経済学部」）の性質上、長年にわたり両学部の学生とかなり密に触れ合うことができ、大変幸せでした。双方の学部の学生には、それぞれの学部を専攻した気質があるように思はれ、それだけに個性あふれる質問を受けることが多くとても楽しみでした。

私の二松学舎における教員生活を振り返ってみると、剣道部顧問就任の依頼を受けたことは、その後の人的交流の幅を広げるうえで大きな意味を持ちました。私も多少剣道の経験者であったので、学生の皆さんとはよく稽古をしました。夏期合宿にもかなりの頻度で参加させて頂き、越後湯沢（新潟県）、片品村（群馬県）での楽しい思い出がたくさんあります。ただその中で気づいたことが一つあります。もちろん剣道部の練習

ですから、稽古は相当に厳しいものであり、途中で倒れてしまう者も出てきました。しかし部全体で弱い者を支え、生まれた友情は、卒業後も変わりなくOB間の交流として続いています。禅の大家である鈴木大拙師の言葉に「真の武士というものは、謙虚であり、慈悲もあり、責任を知るといふ点において人一倍鋭敏である」がありますが、学生自体にその実践を見る思いがしました。

二松学舎を去るにあたり、学生諸君に一言申し上げたいと思います。あらゆることに真正面から取り組み、一生懸命勉強して下さい。信頼に足る良い友人を作して下さい。大きな志を持って下さい。ジョン・F・ケネディの有名な演説の中に「国家があなたに何をしてくれるかではなく；あなたが国家に何をすることができるかを考えて下さい」というものがあります。国家という言葉を使わなくとも、自分が社会に対しどのような貢献ができるかを考えてみて下さい。

みなさんの将来が前途洋々たるものであり、幸多からんことをお祈り申し上げます。

略歴

早稲田大学政治経済学部政治学科卒業、同大学法学部大学院法学研究科修士課程修了、社団法人民主主義研究会研究員を経て、昭和63年に二松学舎大学へ。

「チップス先生さようなら」

アーノルド ロス フアルヴォ



私の30年に
亘る二松学舎
大学での冒険
は、単に英語
を教えるとい
うことだけで

はなかった。私の使命は、21世紀のグローバル化した社会に対応するために、学生達に国際的視野を身に付けさせることにあった。私の教員としての主な目的は、言語学習を通して、人間性は物理的や文化的な相違によって引き離されるのではなく、類似性によって分かち合うことができるということを示すことにある。

「私達の共通の人間性」は、私の生涯の課題である。イタリア移民の両親を持ち、生まれた時から私は2つの異なる世界を調和させる必要があった。家ではイタリア語を話し、その他では英語を話した。間違いなく、これが私の人生行路の一番の原動力となった。スタートレックの「新しい世界と文明を探検する」を言い換えると、「フアルヴォ一族の誰も行ったことがない地へ、勇敢に足を踏み入れる」といった感じである。

高校ではフランス語がクラスで一番であった。ピッツバーク大学では、6か月のルーアン大学への留学と1か月のイタリア滞在により、フランス語の能力を高めた。フランス語とイタリア語の学位を取得後、私は平和部隊として知られるアメリカ政府の国際的ボランティア機関に勤めた。旧仏領である西アフリカのセネガルへ行った。首都ダカールで2

年間、そして、南部のカザマンズ地方でも2年間、英語をフランス語で教えた。これらの地域ではそれぞれ、ウォロフとジョラという全く異なる言語が使われており、私はそれらを学んだ。私の努力に対して皆が敬意を表し、セネガルの社会で働きやすいように様々なところで取り計らってくれた。このようなことは、二松学舎大学の卒業生がグローバル社会でよりよく生きていくために必要なことである。

私のウォロフの能力とジョラの上達を、私には言語の才能があることを証明した。そして私は、ミシガン大学の大学院で言語学を専攻した。日本人クラスメイトとの出会いが私のアジア文化への興味をかき立て、私は日本へ来た。到着してすぐ、漢字を学ぶ必要性を切に感じた。漢字に精通することは、人々から敬意を得るばかりでなく、日本人の考え方に対する理解を深めるために重要であることを私は知っていた。私はずっと世界中のすべての人々が理解し合うことを望んで生きている。

最近書いた図書館の季報の原稿の中で、私は特に、学生が批判的思考力を身に付けることの重要性を説いた。批判的思考力は、グローバル化が進み続ける社会において大切である。大学改革では、グローバル社会への対応に重点を置くべきである。メディアは、現代のグローバル社会において、異文化理解とコミュニケーションを促進してくれるであろう。二松学舎大学はメディアに精通し、言語学習にメディアを取り入れるといったより積極的な方針を打ち出す必要があるであろう。

(原英文 訳金子智香准教授)

松苓会各支部活動報告

〈出席・参加者欄は敬称略〉

北海道支部

北海道支部では、8月の支部総会後、道内各地で分会総会を10月に、また正月には札幌地区で支部全体の新年会を開催しています。今号では、分会の様子を各分会役員に、新年会の様子を支部事務局員にそれぞれ報告していただきます。

(支部事務局長 若松顕仁)

道南分会総会

道南分会は増井北海道支部長、若松事務局長をお迎えし、10月19日(土)、函館五稜郭にある「清寿司」で開催されました。参加者は9名。昨年に引き

続き、剣道の達人佐藤新平先生(27期)が参加。力強い筆文字による横断幕をご持参くださいました。講談師荒到夢形(荒井到)



函館市「清寿司」にて

51期)氏は、松前出身の文化勲章受章者で書家の「金子鷗亭」の伝記を製作中とのこと。

二次会は恒例(?)のカラオケ大会。最初は遠慮しながらも、歌い始めると止まりません。開原先生(39期)も自慢の喉をご披露して下さいました。

女性の参加者が増えたのは喜ばしい限りです。顔ぶれが固定化されつつありますが、安否を確認し合う良い機会になっています。

- 〈参加者〉
- 荒井 到 (文51) 開原正信 (文39)
- 齊藤裕子 (文69) 佐藤新平 (文27)
- 細木みゆき(文57) 増井義昭 (文39)
- 吉川 肇 (文59) 吉川真理絵(文60)
- 若松顕仁 (文56)

道東分会総会

道東分会幹事 五十嵐猛 10月26日(土)、令和になって初めて道東分会の総会が、釧路市栄町の「ふく亭本店」で開催されました。秋も深まり、少し肌寒い小雨交じりの天候ではありましたが、7名の方が集まりました。道東分会は、釧路・根室・十勝・北見・網走地方に及ぶ大変広範囲にわたる分会ですが、それにもかかわらず十勝・根室・釧

路・清里をはじめ遠くは札幌からも、佐賀敦司副支部長が愛犬と共にキャンピングカーで駆けつけてくださいました。

さて、会の内容ですが、話題も大変多岐に渡り、濃密な時間となりました。その内容を少しご紹介いたします。①渋沢栄一氏（新札に登場）②中西進氏（令和の名付け親）③石川忠久氏（元号案提示）④夏目漱石氏（アンドロイド）⑤石川梅次郎氏（漢詩作法）⑥乾一夫氏（風呂敷先生・篠沢教授より前にクイズダービー出演依頼・私の恩師）⑦畑ムツゴロウ氏（伊藤さんの麻雀仲間）その他多数。

二次会においても、書き切れないほど話題が途切れることなく続き、来年の再会を約束してお開きとなりました。本当に仲の良い道東分会の皆様感謝いたします。

- （参加者）
- 伊藤正彦（文34） 伊藤久美子（文34）
- 澤向 崇（文39） 佐賀敦司（文49）
- 若松顕仁（文56） 五十嵐猛（文56）
- 眞野清憲（文60）



釧路市「ふく亭本店」にて

◆令和2年支部新年会

支部事務局 佐々木伸

札幌市の積雪量が例年の半分という、近年稀な少雪で迎えた新年1月8日、道内一の歓楽街・札幌ススキノにある「海の音」で令和2年支部新年会が開催されました。参加者は8名。札幌市や石狩市・千歳市のほか、オホーツク管内興部町・清里町まで、広範囲の地域から同窓が集結しました。

増井支部長の挨拶・乾杯で開宴。美味しい料理に舌鼓を打ちながら参加者一人ひとりから「近況や今年の抱負」を語っていただきました。また、今年はオリンピックキヤー、そして札幌市でのマラソン・競歩競技が開催ということもあり、例年8月に開催している支部総会の日程についても検討がなされました。

さて、今年も山崎相談役のお計らいで、二松學舎「論語カレンダー」が参加者に配られました。さらに今回は、大の相撲ファンである佐賀副支部長から令和2年初場所番付表と相撲カレンダーが、また若松事務局長



札幌市「海の音」にて

からは文房具セットが「お年玉」として参加者に配られました。役員諸氏からの心のこもったお品、本当にありがとうございました。宴たけなわの会は、奥村前支部長のご発声でお開きとあいなりました。

このような和気藹々とした雰囲気での会です。今回参加できなかった皆様には、ぜひ次回は奮ってご参加いただければと願う次第です。また、道内出身の在学生はもちろん、帰省や出張、旅行などとタイミングが合いましたら、ぜひご参加いただければ幸いです。その際は事務局までご一報ください。支部一同、熱烈歓迎いたします。

一次会は店内での記念写真撮影で終了。しかし、ここススキノはまだまだ宵の口。雪が少なく歩きやすいことをいいことに、夜のススキノを謳歌したのであります。

本年も北海道支部の活動にご理解ご協力くださいますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

- （参加者）
- 奥村悠二郎（文36） 増井義昭（文39）
- 安部初雄（文42） 佐賀敦司（文49）
- 若松顕仁（文56） 工藤昌彦（文56）
- 富永貴之（文65） 佐々木伸（文74）

◆支部報発行

○第60号令和元年12月11日発行
・令和元年度支部総会を開催しました。

・道南分会開催
・道東分会総会が開催されました。

宮城県支部

◆支部総会 支部長 二上久芳

・令和2年新年会のお知らせ
・平成30年度決算、令和元年度予算

令和元年の総会を12月23日（日）仙台駅前「ともぎかえ」の居酒屋、「ともぎかえ」において午後5時30分より行った。久しぶりに集った同窓生は7名であった。始めに、物故された和田洋一先生（文41）に黙祷を捧げ、自己紹介、支部長二上より状況報告等があり、参加人数が少なくても、毎年実施していくことが大切である旨で、意見の一致をみた。また、昨年度、仙台育英学園高校より三浦朱莉さんが入学したことの報告があった。その後、懇親会に入り、前支部長、千葉 仁先生の発声で乾杯、学生当時の話、お互いの仕事の話等で大いに盛り上がり、8時30分、散会となった。



仙台市「ともぎかえ」にて

- （参加者）
- 千葉 仁（文27） 菊池 純（文42）

栃木県支部

五十嵐伸治(文44) 二上 久芳(文44)
田淵 龍二(文56) 内海 彰子(文56)
井上 健一(文60)

◆支部総会 支部長 寺内 進

2019年10月11日、第一回総会
および懇親会が宇都宮の居酒屋「小
粋」で開かれ、会則、役員、事業、
予算、会報について審議承認されま
した。これでやっと栃木県支部の組
織が立ち上がり、動き出すことな
ります。これもひとえに本部からの
ご支援があつてのこと、感謝申し上
げます。

また、当日は平日にもかかわらず、
江藤学長、小林幹事長の御臨席を賜
わり、会に花を添えていただくこと
もに、大学の現状や卒業生と在校生
との接点などについても、いろいろ
お話を伺うことが出来、懐かしい学
生生活の話
題に留まら
ず、未来へ
向かう二松
學舎の姿を
も知ること
が出来まし
た。

この総会
に向けて
は、7月か
ら小林幹事
長および山



宇都宮市「小粋」にて

村君のご尽力のもと、準備を進め
てきました。総会の案内は、「第一
号・松苓会栃木新聞」を添えて321名
に郵送しました。その結果、返信61
通、そして総会には11名が出席しま
した。返信が約20%というのは上々
ではないかと考えます。今後、連絡
の取れる会員を、この61名から徐々
に増やせればと思います。
総会で決まった斬新？な取り組み
を紹介します。

- 1、ホームページの作成。
過去、今後の活動がわかる。
会員の活動PRにも利用。
 - 2、会報、連絡はメールで行う。
経費・労力の削減。
希望者には郵送も可。
 - 3、会費は取らない。
同窓生で垣根を作らない。
当面は寄附等で賄う。
- 最後に今年度の活動記録と総会参
加者の名前を挙げて、支部報告とさ
せていただきます。

〈活動記録〉

- 7/14 総会の打合せ
- 9/17 会報・第一号発行
- 10/11 第一回総会
- 12/17 会報・第二号発行
- 2/16 第一回文学散歩(栃木市)

〈参加者〉

- 二松學舎大学学長 江藤茂博
- 二松學舎松苓会幹事長 小林公雄
- 村松 慎介(文39) 鈴木 二郎(文41)
- 桜井 哲夫(文41) 石川 礼子(文44)
- 寺内 進(文49) 塚越 正典(文53)

中村 忠守(文54) 山村 達夫(文54)
笹崎 史子(文57) 田崎 俊夫(文58)
川又 則人(文66)

◆支部報発行

○創刊号 令和元年9月17日発行

- ・会長挨拶 松苓会長廣田克己
- ・栃木と二松學舎 支部長寺内 進
- ・二松學舎との思い出 櫻井哲夫
- ・栃木県支部再興に向けて塚越正典
- 第2号 令和元年12月17日発行
- ・令和元年度総会懇親会に参加して
川又則人
- ・支部再興第1回総会懇親会を行
いました。
- ・支部ホームページを作成しまし
た。
- ・支部口座開設のお知らせ
- ・次回企画のお知らせ 文学散歩

茨城県支部

◆支部総会

支部長 沼田俊明

本年度の茨城県支部総会・懇親会
は、令和元年11月9日(土)午後4
時30分から、「ホテルレイクビュー
水戸」において開催されました。

当日は、本部から廣田克己(二松學
舎松苓会会長)にご出席を頂き、支部
参加者8名を加えて、総勢9名での
開催となりました。

総会では、恒例行事となった大洗
の三島中洲詩碑の除草作業が今年も
実施されたことが報告されました。
今回は、昨年の総会の提案に従つ

て、多くの支部会員に案内し、4名
の参加者によって行われたとのこと
でした。この報告を受け、廣田会長
から、中洲先生の詩碑を支部の活動
として守っていくことに感謝の言葉
が述べられ、他県支部会員も含めて
広く参加者を募り、二松學舎の歴史
を訪ねる行事として詩碑探訪を計画
してはとの提案がありました。令和
2年度の除草作業の計画と合わせて
探訪行事の計画を検討することとし
ました。

また、令和2年2月末に任期満了
を迎える支部役員の改選について提
案があり、支部規約に従い幹事会に
おいて新役員を選出し、令和2年度
総会において承認を受けることとな
りました。

総会終了後は、食事をとりながら
の懇談となり、近況報告や会員同士
の情報交換などが行われました。廣
田会長から、大学の様子と併せて本
部事業の紹
介があり、
本部行事へ
の積極的な
参加を勧め
られました。

また、
他県支部
の活動につ
いて触れら
れ、教職以
外の会員、
文学部卒業



水戸市「ホテルレイクビュー水戸」にて

以外の会員が参加しやすい支部行事の開催についてアドバイスをいただき、支部として大いに参考とするところとなりました。
今年度は少人数の開催でしたが、中秋の一夜を楽しく過ごし次回を約束して散会しました。

来賓 廣田克己松苓会会長

支部会員

- 沼田俊明 (文40) 小林 勉 (文41)
- 青山幸雄 (文49) 玉造光英 (文49)
- 菅沢雄二 (文53) 矢須雅進 (文58)
- 田崎康昭 (文58) 上田 芳 (文66)

群馬県支部

◆支部総会

支部長 高柳 薫

令和2年1月25日(土) 伊勢崎プリオパレスにおいて、総会・新年会が行われました。ご来賓として、松苓会本部家永修副会長、東京支部星野優子副会長にお越しいただきました。17名の会員の参加があり、総勢19名。午後2時から総会を行いました。



「伊勢崎プリオパレス」にて

た。総会は、高柳支部長の挨拶に始まり、来賓のお二人にもそれぞれご挨拶を賜りました。その後、高柳支部長を議長として議事の審議に入りました。議事は次の通りです。

- 一、令和元年度事業報告
- 二、令和元年度会計報告並びに会計監査報告
- 三、役員交代並びに確認(*今年度は任期の2年目であり、交代なし)
- 四、令和2年度事業計画
- 五、令和2年度予算案
- 六、令和3年度の総会・新年会の日時・場所について(1月第3土曜日・前橋)
- 七、その他(会則の改正について)

議事は全て承認され、総会は1時間余りで終了しました。
講演会では、「道徳教育と論語」と題して、群馬医療福祉大学の岡野康幸先生からお話を伺いました。道徳に係る教育課程の改善に向け、「論語」を道徳指導のアイテム(教材)として用いることにより、「考える道徳・議論する道徳」へと道徳教育



渋沢栄一記念館にて

の転換を図ることができるとおっしゃっていました。

続いての新年会は、支部長の開会挨拶の後、懇談、近況報告が行われました。近況報告では、37期から85期までの半世紀にわたる来賓や会員が、一人一人話をしたので、世代によつての違いもあり、楽しいお話を伺うことができました。

◆文学散歩(令和元年10月26日)

令和の新しい1万円札として話題となった、二松學舎第3代舎長渋沢栄一氏。日本の近代化に寄与し、果たした役割を学ばせていただきました。当日は、平野光治神奈川県支部長にも参加していただき、支部活動活性化のあり方など情報交換もできて有意義でした。

〈文学散歩コース〉

- ①新田荘歴史資料館、世良田東照宮、他
- ②中島知久平邸
- ③縁切寺満徳寺資料館
- ④渋沢栄一記念館(二松學舎第三代会舎)
- ⑤旧渋沢邸(中

参加者によってはあまり馴染みのない場所でしたが新たな発見もあり、歴史的・文学的にも興味深く参観できたようです。

東京都支部

◆文学・歴史散歩

支部長 矢澤喜成

「幕末・明治の日暮の里」
令和元年10月5日(土)

真夏を思わせる暑さの中、中原事務局長が用意された虫除けスプレーで蚊対策をし、午後2時に日暮里駅を出発。

ルート① 幸田露伴旧宅跡・朝倉彫塑館・天王寺(五重塔跡)・谷中霊園(朝倉文夫・塩谷石陰・阪谷朗廬・石橋思案・福地桜痴・上田万年・徳川慶喜・渋沢栄一墓) 渋沢翁夫人墓の側・裏面に刻された、三島中洲師撰文の「渋沢孺人尾高氏墓表」を読む事が出来た。矢張り名文。日下部鳴鶴の筆による碑文も多く、見応えが有る。



道灌山にて

ルート② 永久寺(仮名垣魯文墓)・全生庵(山岡鉄舟墓等)・谷中防災コミュニティセンター(休憩)

ルート③ 岡倉天心記念公園・夕やけだんだん(谷中銀座)・養福寺(談林派句碑等)・諏訪神社・道灌山等。以上、片山幹事長による詳細な解説で散策。前田藩切通しを抜けて、西日暮里駅へ。駅前の居酒屋での慰労会では、井上前支部長も合流し、親睦を深めた。

(参加者) 本部 廣田克己(文38) 持田賢一(文40)

群馬県支部 新井 喜義(文37)
 千葉県支部 河野千津子(文49)
 神奈川県支部 平野 光治(文40)
 小林 孝彰(文38) 鈴木 久子(特)

東京都支部 生垣しげ子(文38) 森田 陽子(特)
 追田みどり(特) 中金 律子(文42)
 星野 優子(文42) 村松 久美(文42)
 高柳 幸雄(文49) 片山 聖英(文50)
 玉井 賢司(特) 矢澤 喜成(文50)
 黒岩美津子(文51) 中原 敬二(文62)

慰労会より参加
 井上 和男(文42) 大山由美子(文47)
 大淵 俊明(文50) 渡辺 大雄(文65)

◆支部報発行

○第67号 令和2年1月1日発行

・令和2年を迎えて 矢澤喜成
 ・少年時代を回想する 井上和男
 ・幕末・明治の日暮の里を巡る 高柳幸雄

・谷中霊園の虜に 河野千津子
 ・青空に鳳凰を見て 生垣しげ子
 ・神奈川県支部文学・歴史探訪 矢澤喜成

・国語の将来を考える 大山由美子
 ・山田方谷記念館山田敦館長訪問 池田 誠
 ・東京支部事務局から 中原敬二

神奈川県支部

◆文学歴史探訪

支部長 平野光治

令和元年11月10日(日) アメリカ山公園、横浜外国人墓地、山手

111番館、神奈川県近代文学館、山手資料館を経て中華街で昼食、横浜美術館を巡る神奈川県支部文学歴史探訪が開催されました。



港の見える丘公園にて

横浜外国人墓地は、収入につながらない無縁墓所が多数存在しており、維持管理運営にゆくために募金や墓地募金公開も行っていることと、現在の日本の墓地問題をからめて観光の背景にある現実を見た思いがしました。

神奈川県近代文学館では大佛次郎の名前の由来は当然として、多数のペンネームを使って冊子を作成したとお話や個人的には未完ではあるが「天皇の世紀」が好き等大佛次郎ファンを感じるご案内をいただきました。また、建物の美しさに感動しました。

神奈川県近代文学館では夏目漱石に関わる展示や「中島敦展」にひかれ、長時間の見学となりました。山手資料館では資料館に関わることや「関内」の由来等ご説明いただきました。改めて調べてみると、幕府は神奈川県から横浜村へ道(横浜

道)や開港場を作り、今までの川に加えて掘割りと川で区切りその間にある大岡川の分流「吉田川」に「吉田橋」を架け、その橋に関内という関所を設けその関所を通らなければ横浜(関内)には行けない様にし、他の全ての橋にも関門を設けた。その関門の内側を「関内」、そして外側(伊勢佐木町や吉田町等)は「関外」と呼ばれたと書かれていました。関東大震災の時に、横浜の木造洋館の中で唯一倒壊、焼失を免れた貴重な建物です。

横浜美術館ではオランジェリー美術館コレクション「ルノワールとパリに恋した12人の画家たち」や美術館所蔵の作品を鑑賞しました。

〈参加者〉

松苓会副会長 家永 修(文44)
 松苓会幹事長 小林公雄(文38)
 東京都支部長 矢澤喜成(文50)
 支部会員(50音順) 浅居美智子(文33) 網野将美(文64)
 小林 孝彰(文38) 鈴木久子(特)
 原田佐知子(特) 平野光治(文40)
 松丸 由文(文31)

◆支部賀詞交歓会

支部長 平野光治

令和2年1月25日(土) 横浜崎陽軒にて、令和2年神奈川県支部賀詞交歓会が開催されました。松苓会本部持田賢一副会長、東京支部矢澤喜成支部長、千葉県支部河野千津子支部長をお迎えし、支部会員19名を合

め、22名の参加となりました。小林孝彰副支部長による開会挨拶、支部長挨拶後、持田副会長、矢澤支部長、河野支部長より、ご挨拶をいただきました。神奈川県支部顧問の廣田克己松苓会長による乾杯後、料理を味わいながらの懇談となりました。ご参加いただいた皆様から一言いただきました。多用にもかかわらずご参加いただいた理由や近況が語られました。年齢を重ねての今後は「きょういく」と「きょうよう」、「今日行くところがある」、「今日、用がある」や「目標を持って新しい学びをしている」、「生きていく限り参加する」、「去年はよく頑張ったと言える」など、年齢からくる不安を持ちながらも老いることのない意志が表明されました。真実の言葉は参加者の心を揺り動かし、自身の生き方を考える時間となりました。開会前にハリスの希望によりアメリカ領事館に指定された本覺寺詣でを行いました。幕府が用意した横浜村の領事館を断り、各国は当時繁栄していた神奈川県に領事館を開きました。甚行寺がフラン



横浜市「崎陽軒本店」にて

ス公使館、浄滝寺がイギリス、慶運寺がフランス、成仏寺がオランダの領事館となりました。権現山を削って神奈川台場の海を埋め立てる等開国の歴史を垣間見ることが出来ました。

〈参加者〉

- 松苔会本部副会長 持田 賢一(文40)
- 東京都支部支部長 矢澤 喜成(文50)
- 千葉県支部支部長 河野千津子(文49)
- 支部会員(50音順)
- 浅居美智子(文33) 網野 将美(文64)
- 大島 雅文(文53) 片桐佐和子(文57)
- 城所 康子(文43) 小林 孝彰(文38)
- 佐藤 馨(政修5) 鈴木 久子(特)
- 中川俊一郎(文43) 中川順子(令夫人)
- 原田佐知子(特) 平野 光治(文40)
- 廣田 克己(文38) 福島 猛(文44)
- 三嶽 道子(文39) 保田 完次(文41)
- 保田 陽子(文39) 山崎 正伸(文41)
- 吉田 和恵(特)

◆支部報発行

○第39号令和元年10月10日発行

- ・第42回支部定期総会報告
- ・平成31年支部賀詞交歓会報告
- ・役員に就任して 伊藤文雄
- ・千葉県支部総会に参加して
- ・支部会員向けアンケート集計結果

長野県支部

◆上伊那・城下町高遠を巡る文学散歩

去る令和元年9月23日(月・祝)、長野県支部恒例の文学散歩が行われ



高遠町「伊沢修二生家」にて

ました。11時40分にJR中央東線の茅野駅に集合し、駅前の《蕎麦処ひな》にて昼食を済ませ、上伊那地域と諏訪地域とを結ぶ街道(杖突峠)を越え、清水の自家用車で高遠に向きました。13時20分、高遠城址公園に到着。公園内にある高遠町歴史博物館及び絵島囲み屋敷を見学。町歴史博物館の職員の説明により、武田信玄と高遠城を巡る戦い、内藤家を中心とする歴代藩主(徳川家光の異母弟である保科正之を含む。)について詳しく知ることができました。

その後、公園の北側に移動し、藩校の進徳館及び東京師範学校長、初代東京音楽学校長を務めた伊沢修二の生家を見学。生家の敷地内に設置されている「伊澤先生記念碑」の撰文(大正8年3月)は三島中洲先生によるものであり、高遠と二松學舎との浅からぬ因縁を感じました。15時30分に高遠を出発。

16時10分、茅野駅に到着。昼食と同じ《蕎麦処ひな》にて懇親会を開催し、文学散歩は終了しました。〈参加者〉

宮崎県支部

◆支部総会

支部長 内村厚夫

令和元年10月25日(金)午後6時半より季節料理「結び」において令和元年度宮崎県支部総会を開催いたしました。当日は、松苔会本部より小林公雄幹事長においていただき、参加者5名と少ない人数ではありましたが有意義な一時を過ごすことができました。小林幹事長から、「基本問題検討委員会最終答申」の資料を基に松苔会の在り方や今後の活動等について説明がありました。その中で、大学生が松苔会の存在を知らない実態があり、学生会員にしたこと、同期会組織を立ち上げる計画があることなどの報告がありました。

昨今の大学在学者の割合が首都圏8割、地方2割という実態が大きな課題であることも説明がありました。ご多分に漏れず宮崎県からの在学者も



宮崎市「結び」にて

4名という少ない現状でした。また、各支部の課題として、支部総会への参加者が年々少なくなってきたことが挙げられました。今回の支部総会も当初は8月を予定しておりましたが日程調整が難しく10月になってしまいました。携わってみて初めて前支部長の苦労が身にしみて感じさせられたことでした。前支部長の長年の御労苦に改めて感謝申し上げます。

懇親会では、出席者の近況報告を受け、当時の大学の思い出話に花が咲き時の経つのも忘れ楽しい一時を過ごすことができました。次回は今回の参加者はもちろんのこと、会員の参加者が一人でも増えること目標に計画していくことを確認し閉会しました。

〈参加者〉

- 〈来賓〉小林公雄幹事長
- 〈支部会員〉
- 斎田 清秀(文44) 内村 厚夫(文44)
- 都甲 政文(文52) 崎田 浩二(文52)
- 宮元 芳幸(文53)

2020年度大学説明会

大学の最新情報を知る良い機会となります。奮ってご参加下さい。

○青森県青森市

期日 6月20日(土)

会場 JALシティ青森

○新潟県新潟市

期日 6月27日(土)

会場 ホテルオークラ新潟

同期会・OBOG会

さんなな会「卒業50年の集い」を開催して

新井喜義

第37期生について

昭和44年3月卒業。卒業生数 221名（卒業式で卒業証書を授与された者）。現在、住所の判明している者、150名。

開催当日

令和元年11月2日、快晴。12時半に大学に集合。学生の「創縁祭」が実施されていたので、1時間半ほど自由に1、2号館を見学させてもらう。

そのあと、3、4、5号館を学生会に案内をお願いして見学して廻り、懇親会場へ。麹町の中華料理「麒麟宴」で行う。

招待者は、元学長の石川忠久先生ご夫妻、松苓会の廣田克己会長にお出でいただいた。

当日の参加者21名（男子13名・女子8名）。その中で、もつとも遠い地から駆けつけてく



麹町「麒麟宴」にて

れたのは、北は岩手の高橋さん、西は長崎の橋本君であった。

「もう50年!」「あつという間の50年」集まった同窓生からはそんな声が聞こえた。この三番町の地で4年間を過ごした青春時代が、みんなの脳裏に思い浮かんだであろう。

当時の校舎は、90周年事業で建てられた5階建ての白い建物と以前からあった木造校舎だ。それが今や13階建てのビルに変貌。隔世の感である。

しかし、あの時代にはあの時代の青春があり夢があった。特に、誰もが感じていたことは、日本が未来に向けて確実に前進していたことではないか。われわれも一生懸命努力すれば必ず未来が開けると思っていた。そんな時代であった。

会の中では、それを象徴するように、一人一人から、それぞれの場所で、それぞれの立場で自分の人生を生きている言葉が聞かれた。

今回50年ぶりに集って、お互いが元気で70有余年を生きてこられたことと、我が母校「二松學舎大学」が着実に前進の歩を進めていることに幸せを感じた一日であった。

〈参加者〉

- 元学長 石川忠久先生ご夫妻
- 松苓会本部 廣田克己会長
- 秋元和夫・新井喜義・池田ふみ子
- 石渡美佐保・岩島信子・吉良敦子
- 甲賀喜晴・鈴木利武・芹川哲世
- 高橋静子・武田康吉・西澤静子

- 橋本秀雄・畠山幸治・林 金治
- 原 博・深澤賢治・三国屋静雄
- 吉田真行・吉野恵津子

剣道部OB会によせて

篠原 寛

「安保粉砕」「鬪争勝利」「沖繩奪還」「鬪争勝利」と明治神宮を日比谷公園に向けて始動。全国全共闘を名乗る黒いヘルメットの無数の学生の群。憤りを吐き出すかの様な鋭いホイッスルのリズム。沸点に達するかと思われるほどの燃えたぎる熱気。

「光陰如箭」時は流れ半世紀、令和元年11月16日。創部メンバーを含む嘗ての剣道部員諸氏が再び学舎に集合しました。超モダンに一新されたキャンパスに目を見張り乍も時空を超えた再会は、互いに胸襟を開き合うには時を必要とはしませんでした。

第2代主将を務められた先輩は「皆、最初は何処の誰ぞ?」といった顔をしていたが、ホラ見てみる

全く皆があの頃の顔に戻っているぞ」とのお言葉を耳にして郷愁に似た思いを



大学九段1号館前にて

感じたのは自分だけだったでしょうか。さ程広くはなかった教室の数々、まるでスーブの様だった学食のカレーライス、加藤常賢学長直々の中洲詩文の講義の有るまじき眠たさ、決して清潔ではなかった中庭を隔てたクラブ連合会の部室棟のあの根拠のない安堵感。今日、我が母校のキャンパスが目映いばかりの変貌を遂げ在学する後輩諸君に些かの艶羨な感を禁じ得ないものの、我々卒業した者にとってもやはりこれは母校の誇り以外の何物でもありません。第一線を退いた今でも二松學舎で培った4年間を糧として地元の剣道教室の講師陣の末席に名を連ね指導に当た

る昨今ですが、口癖のように子供達に伝えている言葉があります。それは「撃って反省、撃たれて感謝」と。しかし、この剣の道に於ける金言は事によると己自身に言い聞かせているのかもしれない。

〈参加者〉

- 西野正修 (文34) 海老原正一 (文38)
- 小林孝彰 (文38) 鈴出龍弘 (文38)
- 中島雄司 (文39) 市橋信子 (文41)
- 古賀秀樹 (文41) 小嶋吉正 (文41)
- 篠原 寛 (文41) 吉野美智子 (文43)
- 清水勝彦 (文43) 菅原真美子 (文43)
- 五十嵐俊二 (文45) 大淵俊明 (文50)

同期会OBOG会を開きませんか。松苓会本部にお気軽にご相談ください。

大学だより

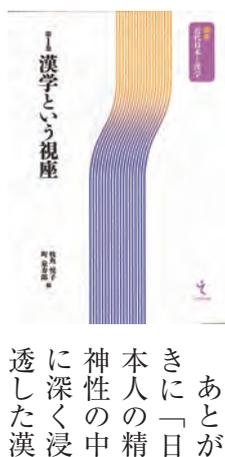
「講座 近代日本と漢学」(全8巻) 刊行始まる

第1巻 漢学という視座

文部科学省の「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に採択の「近代日本の『知』の形成と漢学」(代表 町泉寿郎教授)の研究成果である「講座 近代日本と漢学」(全8巻)の刊行が始まった。戎光祥出版。

責任編集者の江藤茂博学長は、本講座刊行の趣旨を、「江戸時代から近代までの、日本の『漢学』という領域の軌跡を追うことで、広く学問というものの意味を問いたい」「そのための講座本を、何よりも漢学塾から展開してきた二松学舎大学が提供したいと考えた。漢学塾二松学舎の軌跡は、あるいは、創設者三島中洲の人生は、日本の『漢学』が近代社会のなかで揺れ動き、切り刻まれた歴史そのものであるからだ。」と記し、「より広い視野を備えた『近代日本漢学』という学問領域の構築と、その普及を目指したい。」

第1巻は、『漢学という視座』(牧角悦子・町泉寿郎編)。



あとがきに「日本人の精神性の中に深く浸透した漢

学的感性は、目に見える制度や政策の西欧化とは裏腹に、途切れることなく日本文化を形作っている。我々が、近代と漢学というものを、対立項としてではなく同一面において捉えようとする所以である。」(牧角悦子)とある。

第1巻の目次を掲げる。

第I部 総論

- 第1章 漢学とは何か
- 第2章 日本における中国思想―儒教文化を中心に―

第II部 日本文学史と中国古典

- 第1章 上代文学と中国古典
- 第2章 中古文学と漢学
- 第3章 中世文学と中国古典―蟋蟀と螢の歌から―
- 第4章 近世文学と中国古典
- 第5章 近代文学と中国古典

第III部 日本漢学をめぐる諸問題

- 第1章 近代文学と漢文小説―依田学海の作品から考える
- 第2章 漢学・洋学・国学
- 第3章 『論語』と近代文学

【研究の窓】

- 儒教
- 径山無準師範と日本の五山文学
- 白話小説になった日本文学―漢訳「忠臣蔵」をめぐる
- 論語と算盤

(文部科学省の支援事業については、本誌17頁佐藤保名誉教授『恩師からの便り』を参照されたい。)

大西巨人未公開資料の寄託を受けて企画展を開催



その内容によってだけでなく、その成立の経緯によって劇的である。

本学は、『神聖喜劇』で知られる作家・大西巨人の自筆原稿など約8千枚、蔵書約1万1千冊などの資料を遺族から寄託を受けたことを1月28日に報道関係者に記者発表した。2月5日付「朝日新聞」(夕刊)では、『神聖喜劇』見えてきた創作過程 大西巨人の巨編 家族が資料寄託」と掲載された。さらに「読売新聞」(2月11日)、「東京新聞」(2月13日)など他紙でも報道された。今後、山口直孝文学部教授を中心に調査・研究が進められる。

大学では、企画展「作家・大西巨人―『全力的な精進』の軌跡」を大文学資料展示室で2月4日から3月14日まで開催。2月29日には作家・大西赤人氏による「父親としての大西巨人」と題する講演会を予定していたが、今般の新型コロナウイルスのため中止となった。また、東京古書会館(神田小川町)で2月21日から3月14日まで企画展を開催した。

学館でも開催の予定という。

江藤茂博学長、井坂秀一氏(文50)「歌会始の儀」に参列

1月16日、皇居・宮殿「松の間」で行われた新年恒例の「歌会始の儀」に本学の江藤茂博学長と昭和57年3月卒業の井坂秀一氏が陪聴者として出席されました。

井坂氏は、現在、神奈川県立柏陽高等学校校長。全国の公立高等学校長の代表として出席された。

文学部シンポジウムで5月に中西進氏講演

文学部シンポジウムで令和の考案者とされる中西進氏が講演されます。卒業生も聴講できます。ふるってご参加ください。

日時 5月9日(土)午後1時(予定) 会場 二松学舎大学中洲記念講堂 講師 中西 進氏 演題 未定 詳しい日時等はお問い合わせください。

教員免許状更新講習のお知らせ

2020年度の教員免許状更新講習が次の日程で開催されます。

期日 8月17日(月)〜21日(金)

会場 二松学舎大学九段校舎

受入人数 100人

詳細は、教職課程センターにお早めにお問い合わせください。

電話 03(3261)1375

卒業生の支援が在学生の力に！

―寄付講座を実施

キャリアセンターで外部講師をお招きして、3年次生を対象に『自己分析講座』を開催しました。

『Tree of Life』という手法を用いて、自分の今までと今後を一本の木に見立て、将来を考えていくという内容です。自分の『根っこ』って、どんな形なんだろう？自分の『幹』って、どんな太さなんだろう？自分はこのからどんな『木』に成長し、どんな『枝』や『葉』を茂らせたいだろう？それを一人だけで考えるのではなく、他者と語らいながら発見していくワークショップです。

自身の根幹を成すものを理解し、自身の成長の方向性を見極めていく。そんな講座を、卒業生の皆さま【松茶会】の支援事業として行なえたことは、在学生にとっても格別の喜びであったと思います。「自分の過去と現在を考えて未来をどのようか考えているかを整理することができました」―自分自身だけでは気づくことのできない来歴の特徴を知るこ



とができた良い時間でした」との感想にあるように、就職活動の一環としてだけではなく、人生について考えられる時間となりました。

様々な枝葉を繁らせて、大きな木を形成された卒業生の支援で実施できたこの講座。在学生が将来、大きな木に育つよう、引き続きご支援賜ればと存じます。

(キャリアセンター)

大学の授業科目が聴講できます

科目等履修生制度の紹介
大学には科目等履修生制度があり、大学で開講している授業科目を一般に公開しています。

卒業生には登録料の免除、履修料の減額措置を講じています。もう一度大学で学んでみませんか。公開科目 学部・大学院で開講している授業科目のうち、原則として演習科目を除く授業科目

履修料(1科目)
通年科目 3万円
半期科目 1万5千円

募集期間 毎年2月(新年度の募集は終わりました。次の年度に向けて計画してみてください。)

問い合わせ 二松学舎大学教務課

03 (3261) 7406

柏キャンパスで開講の公開講座は次にお問い合わせください。

二松学舎大学地域連携室
04 (7191) 8753

2020年度
大学資料展示室企画展
常設展及び講演会案内

企画展	期
作家の草稿	4月20日(月)～6月6日(土)
三島中洲と近代 其七	6月22日(月)～8月21日(金)
論語	10月1日(木)～11月20日(金)
新修コレクション	2月15日(月)～3月19日(金)

常設展 「資料で迎える二松学舎」

8月28日(金)～9月18日(金)
12月1日(火)～1月23日(土)

講演会 佐藤賢一氏(電気通信大学教授) 演題未定
7月11日(土)

福島一浩書展
「書道ゼミナール」学外展



本学の福島一浩教授(副学長)と3年次「書道ゼミナール」履修学生の作品展(高澤浩一・高橋佑太・福島一浩3ゼミ合同)が、次の日程で開催されます。

会期 3月26日(木)～29日(日)
会場 池袋・東京芸術劇場 ギャラリー1・2、アトリエイースト・ウエスト



2019年度
卒業研究発表会(古典芸能)と卒業書作展を開催しました
4次生が卒業研究の成果を発表する卒業研究発表会(古典芸能)が2月5日、卒業書作展が1月22日～25日の日程で開催されました。写真で紹介します。
なお、卒業論文の提出締切日は、文学部が12月10日、国際政治経済学部は1月20日でした。



『発展期を迎えた頃の二松学舎』

五十嵐 清

昨年の暮れ、松茶会事務局から会報の原稿依頼が学内メールであった。テーマは、二松学舎創立100周年頃の思い出ということであった。そこで、改めて当時のことを思い出してみたが、人間の記憶は不確実で曖昧なもので断片的にしか記憶が蘇ってこない。当時のことを思い出しながらメモを取ってみたが、なかなかうまく纏まらない。仕方なく手許にある『二松学舎百年史』・『明治一〇年からの大学ノート』・『二松学舎大学新聞縮刷版』を見て、当時の自分史を含む年表を作ってみた。

創立100周年にあたる昭和52年から10年間は二松学舎が大きく発展する期間で、主な出来事としては、昭和52年10月に創立100周年記念式典が九段会館で開催され、翌年の3月に100周年第一記念館が竣工、その3年後に一般教育課程で使用する沼南校舎



(現柏校舎)一号館が竣工し、それに併せ文学部の定員増(200人↓400人)が認可となった。翌年の昭和57年には一般教育課程を沼南校舎で、専門教育課程を九段校舎で実施

する新しい教育課程がスタートした。その後、昭和61年には、修士課程であった大学院文学研究科国文学専攻において、博士課程が認可されている。当時の大学は、文学部のみの単科大学で、国文学と中国文学・哲学が併修でき、さらに書道・中国語がどちらの学科に所属しても履修できることを謳い文句に学生募集を行っていた。入学試験は、推薦入試と一般入試で第1期・第2期と3回行っていて、一般入試の第1期・第2期はそれぞれ2日間実施していた。初日に筆記試験、翌日に面接を行っていて、昭和58年までこのスタイルは続いたが、志願者が安定的に確保できるようになった昭和59年の入試から、一般入試を一回のみに変更し、推薦入試と併せ年間2回の入試を行い、昭和62年からは、一般入試2日目の面接を廃止している。さらに、個人的なコレクションとして保管してきた「学生手帳」があったことを思い出し、早々に確認を試してみた。昭和45年度から平成7年度まで揃っていて、平成4年度からは学生生活の手引き(別冊)教員住所録と記されている。定員増が認可された後の昭和58年度の専任教員を見てみよう。浦野匡彦理事長・学長、佐古純一郎文学部長で、国文学科専任教員には、佐古・雨海・田中・花田・剣持・青山・山崎・菅根・清水・鎌田・松本・針原・船城・半田・松田・林・鳩貝・山崎・磯・上総各教授の



総勢20人、中国文学科は、石川・市川・赤塚・宇野・洪・芳原・中田・橋本・斎藤・乾・川久保・横須賀・家井・田村・大地各教授の総勢15人、一般教育では、内野・岸・大谷・荻原・柴田各教授の5人、書道

では、貞広・浦野・難波・寺山・富岳・源川各教授の6人、英語では飯島・新井・加藤・前田・平野各教授の5人、中国語では、中西・久保田・野村・酒井・張・渡辺各教授の6人、フランス語で神戸教授1人、体育で中島・金子・森本各教授の3人、教職課程には、今・中村・石田各教授の3人となっており、各専門分野を網羅した総勢65人の錚々たる教授陣であった。(現在は、両学部で特別招聘教授を加えて、総数71人。)私が本学に奉職したのは、昭和51年の4月、当時の校舎は5階建て校舎が一棟でバスケットコート一面位の中庭を挟んで木造2階建てのクラブ部室棟があった。5階建校舎には、大小教室の他、学生食堂、図書館、事務室、研究室等が入っていて、研究室は専門分野毎に原則2人部屋で、書道や中国語などの研究室は大部屋方式であったと記憶している。また、最初

に配属された学生部第二課は、柴田周蔵学生部長、広田泰一課長、大沼秀紀、小林公雄、岡村幸男、須田恵子各課員で構成されていて、学生の厚生補導・課外活動支援と入学試験に関する事務を分掌し、私は各種証明書や学割証の発行と入学試験事務の補助業務が最初の仕事であったと思う。事務室は、教務課と同部屋で正面玄関右手の校舎1階の鉄格子に囲まれた直射日光が全く入らない所で、そこは空調設備も無く、1台のガスストーブと3台の扇風機が季節ごとにフル回転で活躍していた。それと何故か、教務・学生・図書男性職員の殆どが普段から白衣を着用していたことを思い出す。一方、当時は教学関係の会議といえれば教授会くらいで、もちろん各種委員会制度は導入されてなく、事務処理もあまり複雑なものではなかった。各高等学校等への大学新聞の発送業務、入学試験の採点集計業務、入学試験要項セット業務等は職員が総出で一斉作業を行うことが定例化されていて、普段あまり話すことの無い人も作業をすることとなり、一斉作業に携わることには、ある意味楽しみでもあったことを懐かしく思い出す。

近年の多様化・複雑化した事務処理とは隔世の感があるが、事務主体で業務を推進する当時のスタイルは、そこに改革のヒントがあるように思えてならない。

(学校法人二松学舎常任理事)

恩師からの便り

21世紀COEプログラムと私

佐藤 保



私が二松學舎大学の専任教員として教壇に立っていった期間は、そう長くはなかった。理由は極めて単純なもので、平成14年4月1日に二松學舎に採用されたときには、すでに定年間の68歳という年齢に達する年であったからである。規程からいえば、着任後3年の平成17年3月31日を以て任期満了となるはずであった。

一方、21世紀COE Center of Excellenceプログラムは、文科省が平成14年度から始めた特別事業で、日本の大学に国際的な研究水準の向上と創造的な人材育成を求めて支援しようというものであった。そして、初年度の平成14年は人文科学分野での募集が行われたのである。この特別事業に深い関心を懐いた石川忠久学長が、前任校の任期を了えてのんびりしていた私に目をつけて声をかけられたのが、私と二松學舎大学、そして私とCOEプログラムが結びつく原因となったのである。ただし、何時の時点で石川学長から二松學舎大学への勧誘を受けたのか、詳細はまったく覚えていないが、平成14年の手帖を見てみると、2月から3月にかけて4回ほど「二松」に関連する文字が残っている。このことから、どうやら2月頃に最初の話

しがあったのではなからうか、と思う。

2月13日(水) 12:00

二松學舎

2月27日(水) 13:00

二松學舎大会議 聖堂仮校舎

3月12日(火) 13:00

二松學舎大 柏校舎

3月27日(水) 1:30

二松學舎 COE 沼南校舎

この中で最後の会議は恐らくCOEに関する大学の正規の会議であったと思われるが、そうだとすれば、私は採用の辞令をもらう前に会議の席に着いていたことになる。いささか異例といわざるを得ない。

ともあれ、残念ながら平成14年度の応募は失敗に終わった。次の平成15年度は自然科学分野が対象であったために見送り、そして平成16年の「革新的な学術分野」には十分な準備をして応募した。結果は、「日本文学研究の世界的拠点の構築」が、みごとに一次審査を突破、さらにヒアリングもクリアして、採択されたのである。

この平成16年のCOEプログラムは、平成20年まで文科省の支援を受け、さらに平成27年に採択された文科省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業、いわゆるSRF Strategic Research Foundationの「近代日本の『知』の形成と漢学」に連なる本学の日本文学研究の根幹となったものである。当時の高揚の空気を想い返しつつ、総括責任者として微力を尽くしえたことを喜んでい

(名誉教授)

卒業生だより

井上志朗(志幽)氏(文35) 京都で書展開催



井上志朗氏が令和元年11月4日(6日、京都・堀川ギャラリー)で『井上志幽・欣也書展』を開催した。欣也氏は御子息。井上氏は、昭和42年3月卒。香川県下で公立高校教諭34年、私大講師2校で11年勤務。これまで個展5回開催。香川県美術家協会会員。「言の葉書会」主宰。

嵯峨恵子さん(文45) 『詩集 旗』刊行



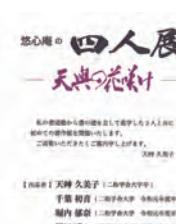
昭和52年3月卒の嵯峨恵子さんが『詩集 旗』を昨年11月1日、ふたば

工房から刊行した。

嵯峨さんはこれまで、『嵯峨恵子詩集』(芸風書院 1982年)をはじめ、詩集に会社員たちの姿を通して現代社会を問う『愛すべき人々』(思潮社 2000年)、介護される母、介護する父を娘の目から描く『おかえり』(アートランド 2000年)、長短の詩を集めた『悠々といそげ』(思

潮社 2007年)など、8冊の詩集を刊行している。所属同人誌は「ガーネット」「歷程」。千葉市在住。

天艸久美子さん(文52) 『悠心庵の四人展』開催



昭和59年3月卒の天艸久美子さんが「私の書道塾か

ら書の道を志して進学した3人とともに初めての書作展を開催」。3人とは、二松學舎大学を令和2年3月に卒業する第88期の千葉初音さん、堀内郁奈さんと東京学芸大学在学学生1人。会期は令和2年3月20日(22日、宮城県仙台市の「書ギャラリー親かめ子かめ」で。天艸さんは、毎年、ホームカミングデーの作品展に出品。本年1月22日から開催の「卒業書作展」を見学されていました。宮城県在住。

堀井泰蔵氏(文55) 陸将として第8師団長に

松茶会報第59号(平成30年3月発行)に御寄稿頂いた堀井泰蔵氏は、令和元年8月23日付で陸将として熊本、宮崎、鹿児島3県を管轄する陸上自衛隊の第8師団長に着任されました。高級幹部は殆どが防衛大学出身者で占めるなか二松學舎大学卒とし

て異彩を放っている。着任式の模様が8月25日の『西日本新聞』で報道された。

堀井陸将は、新年挨拶で、「『鎮西機動師団』たる第8師団は、着実に時代の求めに応じた実力を養い、真に精強な部隊、プロフェッショナルな部隊員を育成するとともに、あらゆる事態に即応し、強靱に任務を完了し得るよう、即応態勢を維持し、厳しい訓練により精度を向上させ、常に最善を尽くしていく所存」（第8師団HP）と語っている。益々の活躍が期待されます。

真真 関 浩恵さん (文56)
5月に「二胡リサイタル」



24年間勤務の千葉県立高校教諭から轉身の二胡奏者真真さんのリサイタルが、5月3日（日）日暮里サニーホール・コンサートサロン（ホテルラングウッド4階）で開催されます。チケット等の問い合わせは、HP <http://www.shinshinn.com/>まで。

小嶋明紀子さん (博35)
漱石記念漢詩大会で最優秀賞



大学院文学研究科博士後期課程を平成15年3月に単位取得満

期退学された小嶋明紀子さんが、第4回漱石記念漢詩大会（同実行委員会主催・熊本市）で最優秀賞を受賞した。

受賞作品は次のとおり。
西湖孤山觀梅
湖邊幽歩柳毵毵
閑聽春鶯水似藍
千載風流在何處
梅開隱士一山庵
西湖孤山觀梅

湖邊 幽歩すれば 柳毵毵たり
閑かに春鶯を聴けば水藍に似たり
千載の風流 何處にか在る
梅は開く 隱士の一山庵

小嶋さんは、これまでも「全国ふるさと漢詩コンテスト」（佐賀県多久市）で最優秀賞を、「第11回諸橋徹次博士記念漢詩大会」（新潟県三条市・諸橋徹次記念館）秀作賞などを受賞している。
神奈川県藤沢市在住。現在は東京都立松が谷高校勤務。

古谷田奈月さん (文72)
『神前酔狂宴』で野間文芸新人賞



昨年7月発行の古谷田奈月さん『神前酔狂宴』（河出書房新社）が、第41回野間文芸新人賞を受賞した。

小谷田さんは、2013年「今年の贈り物」で第25回日本ファンタジーノベル大賞を受賞、『星の民のクリスマス』と改題し、刊行。17年『リリース』で第34回織田作之助賞受賞。18年「無限の友」で第31回三島由紀夫賞受賞、「風下の朱」で第159回芥川龍之介賞候補。『望むのは』で第17回センス・オブ・ジェンダー賞大賞受賞。他の著作に『ジュンのため』の6つの小曲』がある。

影山 亮氏 (文79)
『太宰治と埼玉文豪展』を企画



平成23年3月卒の影山亮氏は、さいたま文学館の学芸員として勤務していましたが、このたび同館の「太宰治と埼玉の文豪展」の企画を担当。企画展は、2020年1月18日から3月8日まで開催。

会員からの便り

近者説、遠者來

吉原一寛 (文39)



ここも大学であるうか。九州の田舎から東京駅に着き、タクシーに乗って行く先を告げた途端、「そんな大学は知らない」と冷たい返事。仕方なく、大学案内のパンフレットを見な

がら、内堀を不安を抱きながら、桜田門、警視庁、国立劇場、英国大使館を通り過ぎた。正面に神社らしきものが見え、そこを目標てに歩いてみると、「二松學舎大学」とあった。ここが、そうなのか。まずはホッと、次にわが高校より小さいことに又少々不安を感じた。私の母校は平成19年夏の甲子園で優勝した佐賀北高校である。今、目になっている校舎は、何とみすばらしいことか。

ところが外見と中身は私の想像をはるかに超えることとなる。いよいよ講義が始まり、私の選択した時間に出席すると、ほとんどの教授が超一流なのである。昭和35年5月に刊行され、平成30年5月に完結した「新釈漢文大系」（明治書院）の執筆者は今、目の前で話をされている先生方である。漢文にしろ古文にしろ現代文学まで、それはそれは私の心を一瞬にして捉えてしまった。先生方の名をいちいち挙げるには、私に与えられた紙幅を超えるのでやめることにする。

大学4年が過ぎ、38年間の県立高校の教諭生活が終わった。その間、教科書の指導書や全国模試のテスト問題等を執筆することとなったが、これも大学で学んだ副産物である。教員生活を終わり、何をしようか考えていたら、地元の新聞社から、一般の人への文化講座の依頼がきた。それで『論語』と『漢詩』を10年余り続けた。生徒さんはほとんど

女性で、かつての師範学校や高等女学校を卒業した方たちで、こちらが逆に勉強させられた。最高齢者は百歳を越えた人である。先ごろは「西安」にも生徒さん8人と出かけた。「論語」をこれほど熱心に読んだのも、この生徒さんがいてくれたからである。遠くは、柳川（福岡県）からも来てくださる。お陰で老いを忘れてしまっている。

二松學舎大学での墨縁に感謝

宮澤正明（文43）



昭和46年4月、書道への憧れ、漢字の成り立ちへの興味・関心から本学に

入学した私は、迷わず書道部に入りました。100名を超える部員の書の腕前に目を見張り、展覧会に出品経験のない私は焦燥感にかられました。しかし、優しい先輩方や気の合う同級生達とともに、楽しく書の学習に励むことができたことは幸せでした。加えて、大学から歩いて10分足らずの所に神田の書道専門書店や書道用具店があり、毎日のように散策できたことは、これから書を志す者にとって、すばらしい環境にあったと言えます。

大学1年次からの親友で、このたび松茶会副会長に就任された家永修氏とは縁あって現在も折に触れては旧交を温めていますし、書道部で寝

食を共にした五十嵐清氏（現在、本学常任理事）とは今も尚、公私にわたってお世話になっていきます。また、下宿を行き来するほどの仲であった山本明史氏とは、氏が福岡県の高校教員となった以降も電話で昔話や教育談義を続けていたのですが、教頭に就いてまもなく40代後半で急逝されたことは、大学時代の貴重な時間をもぎ取られたような気がして残念でなりません。

当時、書道の教授陣では、石橋犀水先生をはじめ多くの先生方がいらつしやいました。書道部の合宿先では石橋先生の背中を流しながら書の勉強方法を伺い、堀江知彦先生には新宿のとある店で一杯やりながら写経に関するお話を伺いました。寺山且中先生のお宅に伺った折に、山岡鉄舟の書について教えていただいたこと、そして浦野黛岳先生からは甲骨文・金文の最新の情報を伺うなど、当時の先生方から貴重な内容を教えていただきました。それら一つ一つが後の私の書道観形成に結びついていくのだと思います。

大学院では、赤塚忠先生のゼミで学びました。ただし、書道と漢文との両立は厳しいなど感じていた矢先、都留文科大学で書道教員の公募があり、運良く採用されました。都留文科大学では、小・中学校の教員になる学生が多いことから、書写教育の研究に明け暮れることになりました。その後、山

梨大学教育学部に移り一昨年定年を迎えました。なお、10数年前から新装なった二松學舎大学大学院では、集中講義の科目を担当させていただいております。

大学教員になって間もなく、全国大学書写書道教育学会を研究成果の発表の場とし、浦野先生が理事長を務められたあと私が引き継ぎ、現在は会長として斯界の発展を祈っております。この間、国語科書写教科書（光村図書）の編集執筆に携わりながら、文科省の中央教育審議会の国語科委員として二期にわたり書写教育の今後の方向について意見を述べることが与えられました。今次の学習指導要領改訂では、情報化社会が定着し書写教育の意義が問い直される中、小学校低学年では点画の書き方が重視され水書用筆等が学習用具として導入され、書写の集大成となる中学校では、「文字文化」をキーワードとして、高校の芸術科書道や国語科への円滑な移行が期待されています。

40年にわたって国語科書写の研究を継続できたのも、二松學舎で学んだことや友人達との交流に影響されてきたものと確信します。これから当時の先生方や墨縁に感謝をしつつ、過ごして参りたいと思います。

さて、私が現在まで走り続けているマラソンの回数は、フルマラソン60回、ハーフマラソン83回、30キロ20回、10キロ5キロは数えられませんが、特に5年前に出場させて頂いた東京マラソンは大会前の抱負等を書く原稿の中で、卒業前の退学寸前の私のクラスの生徒達を無事に卒業させた経験等を2千字書いて送付しましたら、フジテレビの担当の方々が

生涯現役

齊田清秀（文44）



私は現在、宮崎県の鵬翔高校の国語科の教諭として永く勤めさせて頂いています。

まず、着任と同時にハンドボール部を作り監督として多くの大会に部員達と共に参加し審判もやらせて頂き各大会で笛を吹いています。クラスも2年前まで毎年持ち上がりで学級経営をさせて頂きました。

そんな日々の中、寸暇を見つけ毎日欠かさず走り続けています（雨天時は雨具を着け、飲み会がある日は早朝走り、夕方会議の時は時間前に走る等の工夫をしています）。勿論体調を自分なりに管理しなければ走れません。20年前から毎朝夕の血圧・脈・体重・体脂肪・朝昼夕の食事の内容、1日と月別の走行距離等を詳しく日誌として記録し、私なりに体調管理を続け月間走行距離は300キロ位です。

さて、私が現在まで走り続けているマラソンの回数は、フルマラソン60回、ハーフマラソン83回、30キロ20回、10キロ5キロは数えられませんが、特に5年前に出場させて頂いた東京マラソンは大会前の抱負等を書く原稿の中で、卒業前の退学寸前の私のクラスの生徒達を無事に卒業させた経験等を2千字書いて送付しましたら、フジテレビの担当の方々が

ら取材依頼があり、学校、自宅等で2週間の密着取材が行われ、大会当日ゴールで待ち受けていたのは大人になったその生徒達でした。そのサプライズに私は驚き感涙いたしました。このシーンは大会当日の夜、ミスターサンデーという番組で「平成の金八先生」という題で放映され全国の方々から感動のお言葉を戴きました。その他にも宮崎県綾町の照葉樹林マラソンに1回から33回連続出場が私1人だということ、主催者側の地元のテレビ局のUMKに特集で放映され、宮崎日日新聞にはカラーで特大に掲載されました。

ところで毎年12月に開催されます青島太平洋マラソンもフルマラソンの部で第1回から連続出場継続中です。これからも二松學舎魂を持ち、多くの人に支えられながら走りま

す。なお、「体調管理日誌」は、私自身の管理日誌です。マラソン歴が長いものですから体調管理についての講演を時々依頼されることがあり、その時、二松學舎大学で過ごした学生時代の思い出を語らせてもらっています。

また、年に2回（2月と3月）必ず上京して2月の青梅マラソン、3月の板橋シテイマラソンに出場させてもらっています。その時母校を見学に行くのを毎年楽しみにしています。

懐かしい風景が支えてくれる今

山村達夫（文54）

自らの近況を便りにして発表していくことに、少し恥じらひを感じながら、この原稿を書き始めています。

私の仕事は、主に幼児教育と障がい児者福祉に関するものです。栃木県宇都宮市で、学校法人立の「認定こども園まこと幼稚園」と小学生を対象としたアフタースクール、また身体に障がいを抱える人々を対象とした障がい者支援施設、認可保育園、小規模保育事業を運営する社会福祉法人「藹藹会」の経営に携わっています。両法人を総称してEducareize（エデュケアライズ）グループと称し、「教育と福祉を融合することで地域に新しい価値を実現する」ことをコンセプトにしています。

また、いくつかの大学での講義やFMレディオオベリーやCRT栃木において、ラジオ番組でのパーソナリティーやコメントーターの仕事なども併せて行っています。

幸い、地方都市ではあります。が、両法人



「600年の歴史を持つ世界最古の学園インスティテュート、デリ・イン・ノチェンティを訪問」筆者は右

共に地域の皆様のご支援により順調に運営されていますが、そこには180名の職員の努力があると思っております。その努力は、あるコンサルファームが実施する職員活性化・満足度調査において、2016年から4年連続1位という結果が証明してくれています。

「経営」という営みはそのプロセスにおいて、まずお客様を定義し、そのお客様が望んでいることを表現できなくてはなりません。そのお客様のために経営学はもちろんのこと、哲学、心理学、教育学、工学といった様々な分野を関連付けながらサービスの開発や実践をしていくものです。その底流には物事の捉え方や物事に対する態度が重要な要因になると思います。

その意味で、二松學舎大学に入学し、国文学や東洋哲学に触れることができたことは、私の経営観を確立するうえで、大きな財産となっています。そして、入学時に面接官であった故宇野精一先生に「君は丈夫そうだね」と声をかけていただいた時の風景、塚原鉄雄先生からいただいた、「真の師を得ることは難しく、また喜びである」と書かれた一枚の葉書は、私の心に懐かしい風景としてしっかりと刻まれています。

（学校法人金子学園・社会福祉法人藹藹会理事長）

槇冬重として…

上野有美子（文61）

私は二松學舎大学文学部中国文学科を卒業後、中国政府奨学金留学生として、書と篆刻を学びに中国美术学院（中国浙江省杭州市）へ留学。同大学院へ進み修士課程を修了しました。このように中国へ国費留学出来たのは、二松學舎大学で書と中国語の両方を学んだことが大きいと思っています。特に中国語は、久保田美年子名誉教授のゼミで鍛えられました。現在は、故郷・富山で書と篆刻の制作をしながら、槇冬重（まきとうきん）という名で、展覧会活動等を行っております。

昨年末は新宿のヒルトン東京で「槇冬重 書と篆刻展」を開催しました。帰国後約20年間の作品を一堂に展示した、これまでの足跡をたどる



新宿・ヒルトン東京での「書と篆刻展」

感慨深い個展となりました。今年も、夏に京都文化博物館別館で個展を、11月末にドイツ・ロストックで公開制作の予定です。

これからの二松學舎大学で学んだことを礎に、作品を制作していきたいと思っております。いつか皆様にも見ていただければ幸いです。

最近の展覧会

2008〜20 書と非書の際展(京都・Art Forum Jatio/京都文化博物館別館)
2011〜19 個展「横冬董・書と篆刻展」(埼玉・伊勢丹浦和店)
2019 万葉を書く(富山・高岡市万葉歴史館)
2019 個展「横冬董・書と篆刻展」(新宿・ヒルトン東京)

学生会員だより

学生会執行委員会会長に就任して



北村あゆかの学生会執行委員会会長に就任いたしました。国際政治経済学部国際経営学科1年の北村あゆかです。

私には、学生会執行委員会の会長を務めさせていただく上で、成し得たい目標が3つあります。

第一に、大学行事を通じて団体の皆様と密に協力していき、二松学舎

大学を盛り上げることで。私たちは学生会執行委員会の力だけでは至らない点を、団体の皆様にサポートしていただくことで、相互に助け合いながら行事を運営していく所存です。

第二に、行事の運営に関わってくださる全ての方に満足していただくような行事を作り上げていくことです。一部の方にしか楽しさを伝えられない行事よりも、全ての方が心から素晴らしいと思ってくただけるような行事を作り上げたいと考えております。

最後に、私はこれからも二松学舎大学の魅力をより多く伝えていけるような活動をしていく所存です。学外の方に魅力を伝える為には、団体の皆様をはじめ、松苓会の皆様や学生支援課の皆様のお力添えが欠かせません。会長として1年間を通じて学生会執行委員会を先導し、掲げた目標の達成を実現出来るよう努めさせていただきます。何卒よろしくお願いたします。

学生会執行委員会の活動

学生会執行委員会の活動について説明いたします。主に、1年生と2年生を中心に活動しております。任期は、1月から12月となっております。主な活動は、4月に新しく入学した1年生を歓迎する新入生歓迎式典。5月に学生会執行委員会役員紹介や前年度の活動報告、今年の活動予定、予算案、決算報告、規定の改定や学

生から寄せられた議案の決議を行う定期学生総会。6月に文化系団体の文化祭である九段祭POP。これらの3つの行事を学生会執行委員会が運営しております。また夏休み頃から私たちは学生会執行委員会から学園祭実行委員会に名前を変更し、発表をするだけでなく模擬店など様々な催しがある創縁祭を運営していきます。また各行事に各責任者がおり、その責任者を中心に運営しております。



学生会執行委員

新入生歓迎式典について

新入生へ二松学舎大学に所属するクラブ団体やサークル活動を周知するにあたって、新入生歓迎式典を今年は4月4日に開催いたします。今年のテーマは「薫風」。

コンセプトには「新しい芽吹き。二松生がクリアな関係を紡ぐ瞬間を春一番に感じとってもらいたい」という意味を込めて、役員全体が新入生歓迎式典に向けて奮起しております。

昨年は、迎えられる立場であった

私たちが、今年は新入生を迎える立場として、どうしたら楽しんでもらえるかを考え、昨年度よりパワーアップした行事を作り上げるために準備を進めております。今まで牽引してくださった先輩方の任期が終了し、私たちが初めて主体となって運営する極めて重要な行事となっております。不安も多々ありますが、先輩方にご指導していただいたことを基に、より良い行事を運営していく決意をしておりますので、どうぞご期待ください。(北村)

2019年度創縁祭を開催しました



サークル紹介
軟式野球部



軟式野球部部长を務めている渡邊佳樹です。

自分達の主な活動は、春と秋にある東都軟式野球リーグ戦に参加し全日本野球選手権、東日本野球選手権大会への出場をかけた試合をすることです。

二松學舎大学が所属する東都リーグは、強豪校が多く勝ち上がることは容易ではありません。そして毎週土曜日のみと限られた合同練習ではあるものの、



渡邊佳樹

選手一人一人が勝利を求めて日々の個別練習に励んでいます。

現在は部員数が少なく、チーム状況は決して良くありません。なので春の新生歓迎会で少しでも軟式野球部に興味を持ってもらい、部員数を増やすことでチームを活性化できたらと思っています。

これからもリーグ戦での勝利を目指し、全日本や東日本に向けて日々練習を励みたいと思います。応援よろしくお願いします。

(国文学科2年)

漫画研究会

齊藤 陸

当サークルでは年に数回冊子の作成を行なっており、冊子にはサークルメンバーが各々描いた好きなキャラクターやオリジナルのイラストなどを掲載します。冊子作成の魅力は、それまで交流がなかったような人や他学年の人とも、完成した冊子を通して親交を深めることができる点です。また、冊子の内容は自由度が非常に高いです。絵を描くのが苦手という人でも、自分の好きなマンガなどについて思うがままに感想を書いていきます。



普段の活動では、同じ趣味を持つ人同士で会話を楽しんだり、イラストに関する知識を深めあったりしています。

創縁祭では毎年、冊子の配布やパネル作成、屋台の出店などを行っています。昨年はポップコーンの屋台を出店し、来場者の皆さんから高い評価をいただきました。会場入り口に飾るパネルの作成は1〜3年生が中心となっており、学年の壁を超えて協力し合い完成させました。

今年の創縁祭でも、

多くの人がマンガや当サークルに興味を持ってくれるような出し物が出るように努力していきたいと思えます。

(国際政治経済学科1年)



学生の活躍

松浦桜香さん

ふれあい全国俳句大会で大賞受賞

文学部中国文学科4年の松浦桜香さんが第26回都留市ふれあい全国俳句大会で大賞(文部科学大臣賞)を受賞しました。受賞作は、

講義まであと三分のかき氷
また短歌では、「心の花」(短歌結

社竹柏会)主催の「心の花賞」で俵万智選者賞・田中拓也選者賞を受賞しました。

松浦さんは学内のクラブ「松風短詩会」に所属。

『週刊読書人』に書評

千代田区立千代田図書館「書評キャンパス」いまどきの大学生解体新書」に展示

松茶会報前号(第62号)で紹介した学生に続き、次の学生の書評が『週刊読書人』に掲載され、千代田区立図書館の「書評キャンパス」いまどきの大学生解体新書」に展示されました。

郡司和斗さん(国際政治経済学部3年)
長嶋有著『新装版 春のお辞儀』
初芝里帆さん(文学部3年)
荒井裕樹著『差別されてる自覚はあるか 横田弘と青い芝の会「行動綱領」』

近藤伶香さん(文学部4年)
くどうれいん著『わたしを空腹にしないほうがいい』
千代田区立図書館の展示には次の学生の書評も展示されました。

長坂琴音さん(文学部3年)
岸政彦著『断片的なもの社会学』
米山あさみさん(文学部1年)
村田沙耶香著『マウス』

上田彩香さん(文学部4年)
羽田圭介著『コンテクスト・オブ・ザ・デッド』

第88期卒業生同期会を結成 5年後に同期会開催を目指す

令和2年2月22日、4年次生の各ゼミナールのゼミ長等を対象とした同期会結成のための説明会が開催され、「第88期同期会」の結成を承認しました。

説明会は、廣田克己松苓会長から挨拶があり、続いて、同期会設立の主旨、運営方法等の説明があり、質疑応答の後、「第88期同期会運営要領（暫定）」を了承、令和2年3月16日（卒業式当日）に施行することとして、同期会の結成を承認しました。その後、同期会幹事の選出について協議したところ、本日出席の皆さんが全員幹事となることを確認し、代表幹事、副代表幹事は卒業式までに選出することとして説明会を終了しました。

最後に、廣田会長から、卒業式当日、結成式を計画したいとの説明がありました。

運営要領の概要は、次のとおり。名称は、二松學舎松苓会第88期同期会とする。同期生相互の親睦・連携を図り、母校二松學舎大学の発展を支援することを目的とする。

同期会の会員は、2019年度（令和元年度）に二松學舎大学文学部及び国際政治経済学部を卒業した者。当面、連絡事務所を二松學舎松苓会本部に置く。

運営は、同期会幹事を10〜15人位置き、その中から、代表幹事、副代表幹事各1人選出する。同期会の運営は、代表幹事、副代表幹事、及び幹事による役員会（幹事会）を以て

行う。役員会は、原則として年1回以上開催する。

幹事の任期は5年とし、代表幹事、副代表幹事の任期は2年とする。

幹事は、会員の動向を把握し、松苓会本部や支部・同期生との連携を図る。

最初の同期会は、当面、卒業5年後に開催することを目標とする。

88期同期会の幹事は次のとおり。

- 柏葉和希 柏谷美月 川上 匠
- 小松華恋 常見莉彩 三石健人
- 遠藤淳広 飯塚理央奈 関根祐太
- 武次海斗 辻下真理子 堀内郁奈
- 藤田涼子 四ツ谷美羽 保坂駿英
- 金谷美佑（順不同 敬称略）

上記以外に、引き続き、幹事を募集する。松苓会本部、または学生支援課まで申出てください。

同期会結成に合わせ、松苓会本部では、これまで文学部、国際政治経済学部で卒業期名を異にしていたが、今後は、

旧制の二松學舎専門学校第1期生から通しての番号を卒業期名とすることとした。文学部、

国際政治経済学部卒業生とも88期生、88期同期会と呼称します。



「人材バンク」登録募集

あなたの力で、会員や大学を応援してください

会員（含学生）の求める機会に、会員の皆さまの智慧や技能を提供していただく事業を立ち上げました。登録をお願いします。

- 内 容 講義・講話・講演・指導などの講師
ボランティアを基本とし、必要経費は主催者と相談により決定
- 登録方法 1 松苓会事務局に、メールで「人材バンク登録票の送信」を請求
2 登録票と要項をデータで受け取る
3 登録票に入力してメール添付にて返送（実践例があれば添付）

登録申請・問い合わせ先 松苓会事務局 〒102-8336 東京都千代田区三番町6-1-6
TEL 03-3261-7408/FAX 03-3261-8914/E-mail shourei@nishogakusha-u.ac.jp

表紙写真募集

募集対象者 二松学舎大学学部在学生
募集写真 年2回発行（9月と3月）の松苓会報表紙掲載写真
ジャンルは問いませんが、会報表紙にふさわしいもの。
募集期間 9月発行号は8月末日、3月号は1月末日を締切日とします。
応募点数 各号とも一人1点
応募方法 写真データ送信先メールアドレスに、件名「松苓会報の表紙写真応募」と入力し、応募者の氏名、学年、学科、連

絡先（電話番号）と写真の簡単な説明（撮影場所等を含む）を明記し、「写真データ」を添えて送信してください。

- * 応募写真は未発表のものに限ります。
- * 応募写真は応募者本人のみに全ての権利（著作権を含みます）があるオリジナル作品に限ります。
- * 掲載写真撮影者には、記念品をお贈りします。
- * 作品の選考・掲載に関する問い合わせは受け付けません。あらかじめご了承ください。
- * 注意事項等詳細は、別途「募集要項」（学内メールで通知）で確認してください。
- * 送信先 E-mail shourei@nishogakusha-u.ac.jp

次号より、卒業期別の表記を専門学校1期生からの通し番号に変更します。今年度卒業生(文88、政25)は、ともに「第88期」となります。

俳優 水島涼太さんの一人芝居「看取り」を後援

東京都支部の講演会講師や文学散歩などで松茶会を応援していただいている俳優の水島涼太さん(劇団未成年主宰)がライフワークとして取り組んでいる、一人芝居「看取り」の公演が行われます。松茶会はこの公演を日頃の感謝をこめて後援します。

日時 令和2年3月28日(土)

① 13:00 ② 17:00

会場 溝ノ口劇場 神奈川県川崎市

高津区久本3-1-5

料金 4千円(1ドリンク付き)

問合せ 電話044-850-0038

https://www.nizogeki.com/miori

寄付者芳名

平成31年3月1日から令和2年2月末日までにご寄付いただいた方のご芳名を掲載します。(敬称略) たくさんの方のご協力に心より感謝し、厚くお礼申し上げます。(二口千円)

- 二十口 深澤 賢治 文37 小田 和磨 専17 重田 佳子 文38 小林 公雄 文38

- 廣田 克己 文38 持田 賢一 文40 金井 康 文41 佐藤 修 文41 鈴木 正恵 文41 宮下 宗樹 文43 家永 修 文44 黒沢 敬二 文45 佐賀 敦司 文49 長澤 悟江 文50 丸山 論 文52 川嶋 洋子 文54 田島 勲 文56 早野健太郎 文59 五口 新井 喜義 文37 島山 幸治 文37 市川 友子 文38 長谷川順子 文43 二上 久芳 文44 矢倉美登音 文46 花岡 邦朗 文48 平山 要子 文48 柴田 浩二 文51 安倍 洋子 文54 山口 直美 文63 川俣 茂 文63 相良 恭子 文69 三三七六口 さんなな会 文37 三三三 小林 政明 文39 田丸 勉 文39 中村 良子 文44 齊藤 賢康 文49 齊藤ゆかり 文51 美濃部祐子 文59 上田 道子 文68 星野 正貴 文15 二口 樋口 文雄 文24 本間祺一郎 文38 清水 登 文42 杉江 訓子 文47 田辺 俊建 文50 蛭海 悠司 文51 荒井 俊郎 文54 寺澤 紀子 文54 吹原 礼憲 文63 坂本 一宏 文67 宮川 望 文71 森山 奈帆 文71 一口 北澤 重行 文31 三林 忠明 文34 津野 高雄 文37 山本 武司 文37 小川 紀子 文44 鈴木 美帆 文48 長田香陽子 文48 矢澤 喜成 文50 外木 博子 文51 中沼美智子 文57 長岡 美佳 文61 富沢 綾子 文68 池谷 賢志 文69 飯田 修子 文78 中本 雄希 文79 清水 広介 文6 大瀧伸太郎 文21

訃報

岸田勝則(明道)氏(専4)

令和元年6月30日逝去 享年108

岸田勝則氏は、昭和9年3月二松學舎専門学校卒業。東京都内の公立中学校に勤務、中学校長を最後に定年退職。昭和54年4月から同63年3月まで二松學舎大学非常勤講師を勤められた。専門学校1回卒の清超金子哲太郎先生門下の書家。二松學舎大学柏校舎の「武道館」の扁額を揮毫された。平成23年9月には、「知事の百歳訪問」として当時の石原慎太郎知事の訪問を受けたことが報道され、東京都庁のHPにも掲載されています。

嘉部益次氏(専17) 令和2年1月18日逝去 享年92歳 嘉部益次氏は、昭和22年3月二松學舎専門学校を卒業。専門学校1年に在学中、昭和20年3月10日の空襲で専門学校校舎が全焼する時の防空要員として消火作業に従事したことを「二松學舎百年史」に寄稿されている。専門学校卒業後は、長野県下で公立高等学校に勤務。

平成7年9月から平成15年8月まで松茶会長長野支部長を務められた。謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

表紙写真

松茶会報の表紙の写真を、今回初めて学生に募集しました。国際経営学科2年の張 建国さんの作品です。港区レインボーブリッジから眺めた東京タワーが中心にあり、背後に六本木ヒルズがうかがえます。写真についてのご本人の説明は「古き学び舎で感じる令和の美しさ」です。

二松學舎松茶会報 No.63

創刊 昭和62年12月1日 発行 令和2年3月16日 集約所 二松學舎松茶会 〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16 電話 03-3261-7408 FAX 03-3261-8914 振替口座 00180-5-160343 (郵便局払込取扱票) 印刷 (株)サンセイ



編集後記

『会員からの便り』は長年の研鑽、実績に「継続は力なり」を実感。『発展期を迎えた頃の二松学舎』には往時の息吹きが懐かしくしのばれる。『卒業生だより』は誇らしく頼もしい限りである。

さて、新型コロナウイルスの対策として、各種イベントが自粛。本学の異業種交流会も中止になった。イベント開催については問い合わせを。

二松學舎大学(松茶会) ホームページ www.nishogakusha-u.ac.jp 松茶会 E-mail shourei@nishogakusha-u.ac.jp